

米国入国審査 係員とのやりとり

2月にケンタッキー州ルイビルのファームシヨウに行ってきた。入国審査で「どこに？」と質問されるのが面倒なので、物は試しだと考え、以前ノース・ダコタのヘクター飛行場で私を見て、かわいい♡と至極当然な日本語を話してくれた店員さん（映画、テレビドラマのタイトル）とプリントされたポロシャツをこの日、このときのために着ていった。LAで入国係員は予想したとおり「どこに？」と聞いてきたので何もしゃべらず、自分の右手の人差し指を Fargo の文字に示した。

失敗だった。入国係員は「ノース・ダコタの Fargo か？ なんで LA に来ているんだ？ LA では何をするんだ？ どのくらい滞在するんだ？」と矢継ぎ早。当然「仕事は？」と聞かれたので「農家です」と答えると、「何を作っている？」。もちろん答えは「小麦と大豆」。ちよつと農業に詳しい係員になると「春小麦か？」「ウインター・ホイト」と答えると係員は納得してくれる。

もう少しヒネクレた係員だと「なぜ農家なのに、この時期に LA に来られるんだ？」。そのときは「私の

住む町はバッファロー、ニューヨークと同じ気象なので、毎年この季節は米国に来ることができます」と答えると大抵は「日本でそんな寒いところがあるんだ」となる。

いままでの経験上、どうも相手が自分よりも緯度が高いか明らかに寒い地域からやって来る場合と、そうではない場合とでは対応に違いがあるように思える。どう違うか表現は難しいが、米国内でも南部と北部の文化の違い、似た文化のカナダと異質な南部のメキシコとの関係や、ドイツを中心とした場合、スペインとスウェーデンの文化的な相違。まっ、稚内から与那国まで日本文化は同じだと、大和民族平等思想教育を受けた子孫には理解できないだろう。

韓国慰安婦像との 永遠の別れ

35年以上の知り合いになる若杉さんの自宅にお世話になり、夫妻の休日にグレンデールに出かけた。そうです、日本人には許しがたい、あの

慰安婦像を前に考えた

Vol.101



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

オレにも 言わせる!

北海道長沼発
ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

韓国慰安婦像が設置されている所です。前から気になっていました。いや日本人だったら一度はこの目でどんなものか確認したかったからだ。

レンタカーにカーナビは装着されていたが、この像がどこにあるのかネットに詳しく番地が記載されていない。これは困った。誰でも行けるようにはつきりとした住所を記載してどのようなものなのか、できれば

設置反対のために日本人は行くべきである。

とりあえずグレンデール中央図書館にあるとあったのでそこを目指した。駐車場は無料だ。像は200ヤード先の敵陣に何のオーラも感じなく小さく座っていた。現地のコリアンは見かけなかったし、デコレーションは本物の花かと思ったが、しっかりとした造花にはがっかりだ。

同行してくれた若杉さんは黒のパンツ、黒のポロシャツ、薄い茶のベストにドジャースのキャップを被っているが、慰安婦像には決して近づこうとはしないで、遠巻きにして眺めているだけだった。米国人に国籍を変えた奥さんのアケミさんが「あの人の服装って完璧コリアンよね」と困った冗談を言った。ご苦労さんでしたと慰安婦像の頭を強めになでて、永遠の別れを告げた。

差別ある町に像を立てたコリアンの能力

その後、午後3時ごろ、二人を茶に誘った。殺伐としたLAエリアではあるが、なぜかヨーロッパの雰囲気のある小じやれた街並みは初めて見る米国だった。でも若杉さんは頑なに茶の誘いを拒否した。それどころかこんな町には本当は来たくもないと信じられないことを言った。

なんでも30年前にレストランを開こうとこのグレンデール市の衛生局に話を持ち込んだところ、「日本人にこの町には来てほしくない」とはつきり言われたそうです。名前をいまでも覚えていて、明らかにアルメニア系の名前だそうです。

私がすごいと思ったのは、このような見える差別が存在したであろうこの町にいまでは日系人よりも多くのコリアンが住んでいることだ。そして彼ら、彼女たちによって日本人には差別以外の何物でもない慰安婦像を立てることができた能力は見習うべきである。もしかしたら虐殺の歴史があるアルメニア人の歴史観とコリアンの何かがビビッと来たのかもしれないですね。

日本人は優秀な国民であると国内で叫んで、集団で公開オナツたところを外に出ればただのアジア人だ。とくに米国に行けば「パールハーバー」をやったイングリッシュも口々にできない信用に足らないアジア人扱いされることもあるのを忘れてはいけない。どんなに正義をかざしても原爆一個ですべてが変わる社会を我々は経験したのだから。

もし日本人が優秀で日本を愛するのであれば、外に出るべきだ。勝手に出かけてもダメだ。当然、国策、特区として都市を決めて集中的に移

住政策をとつてもいい。1970年代のカナダでも外国人農業生産者の受け入れ実績があつたようだが、米国の農地を日本政府が借り、新一世日本人を送り込むのはどうだろうか?

まっ、ダメだな。日本人の農業がすばらしかったら、ザクザク成功者の声が聞こえるのに現実には2次産業か3次産業の話ばかり。所詮日本人の農業はこんなものかと落胆させられるわけだ、などとケンタッキーに向かう飛行機の中でいつものミヤイ・ワールドを妄想しながら、今年

さすが、民主主義を教えてくれた国

ホテルでは前日から江別の西口元治さんが待つていてくれた。以前、乗り継ぎで吹雪に遭い、フライトがキャンセルになったことがあるので、一日早く余裕を持つてきてもらったのだ。西口さんはミネソタで行なわれる大学、普及所主催の暗渠の勉強会に参加するためにやってきた。本業は暗渠屋さんだ。それも土管やパイプを使わない無材暗渠の先駆者でもある。

ホテルは一泊300ドルするチェーンホテルのコートヤードだ。高いが会場内にホテルがあるので歩いていける。安いホテルからタク

シーやレンタカーを使うことを考えれば決して高い出費ではない。

ホテルでのんびりとしながらテレビを見てみると米国の最高裁の保守派判事のアントニン・スカリア氏が亡くなったことを報じていた。もちろん話したことも、お会いしたこともない方だが、のちの国葬(?)をテレビで見えて驚いた。驚いたというよりも感動した。あのシーンはまるで昭和天皇が崩御された大喪の礼と同じくらいの威厳と尊厳を持った葬儀だった。さすが三権分立、米国民主主義を教えてくれた国だ。

次に思ったのは日本の最高裁判事が現職で亡くなった場合はどのくらいの政治的、社会的な影響力があるのだろうか、ということだ。まっ、衆院選とともに実施される最高裁判官国民審査で誰一人罷免がないというか、憲法や常識よりもローカル・ルールがまかり通つてしまう極東アジアの発展途上国なのだから、どうでもよいということなのか……。

えっ、ショウのこと? 次回のお楽しみに♡

とりあえず正しい歴史観を認識するために慰安婦像の住所を記します。

グレンデール中央図書館
222 East Harvard Street, Glendale
CA 91205